



# かじき木だより

校長・幹事会・事務室

## 夏を制した後は

校長 森永 忠秋



梅雨だからとはいって、雨が続いた登下校の心配をした今年。この原稿が皆さんの中に触れる頃には熱い日射しが溢れる夏であつてほしいと思っています。その時は、一年生二年生の声がグラウンドに響き渡り、文武両道に励むいつもの加治木高校の雰囲気も戻ってきていることでしょう。

しかし、いよいよ大学受験が迫ってきた三年生にとっては、受験勉強が本格化する季節です。昔から夏と暑い夏になるだろうと思われます。昔から夏を制する者は受験を制する」といわれます。現在は高校にもクーラーが設置されているので、暑い夏に問題集に立ち向かうというイメージは



**PTA会長 下園 寿秋**

**無限の可能性をもつ皆さんへ**

自分で書いておきながら大変照れくさいのですが、この表題は、映画「ビリギャル」での一台詞を、私なりにアレンジしたものです。

この映画の主人公は、聖徳太子を「セイトクタコ」と読み、福沢諭吉が造ったのは「焼き肉屋」と答える、学力が小学4年生程度、常に学年最下位の高校2年生ギャルです。夏休みに出会った、ある塾の先生のからびやかな励ましに感動し、主人公は偏差値70の難関「慶應大学」を目指すと決心しました。偏差値を今より40上げないといけません。それは過酷であることに違いないと思います。主人公は何度も失敗し、

くじけますが、それでも同級生の何十倍も努力し続け、慶應大学を受験する物語です。また、この映画は実話に基づいているとのことです。大変驚きます(「どうのも、私は原作を読んでいたため、このような表現しかできませんので、ご了承ください」)。この映画の一場面で、「小論文」の受験対策が出てきます。主人公はテレビ・新聞や「現代用語の基礎知識」などを駆使し、時事問題についての小論文を徹夜して書き、塾の先生に提出します。「一読して、とりあえず主人公をほめちぎつてから、先生は指導します。「ジャーナリストの一方的な見解だけでなく、別な人の反対の見解も予想されるので、それも含めて自分の意見を書きなさい」と。この意味は、もっともっと知識を深めなさいと言うことなのでしょうか?主人公は、社会的な知識を深めるため、一層鍛錬していくことを思つていています。これがこの映画を見ようと思つている皆さんがつまら

薄いかも知れませんが、この夏休みが大きな比重を占めていることは変わりありません。三者面談等でアドバイスを貰った後は全力で目標に向かって邁進しなくてはなりません。文武両道をめざす加治木高校生ですが、本当の勉強の厳しさを知る季節の始まりです。書いている最中、サッカーワールドカップ決勝があり、なでしきジャパンの戦いが終りました。大会前は、余り良い結果が出せず本当に世界に通用するのかと心配されていたなでしき達でした。予選リーグでは、怪我による離脱者も出了ました。体格でも不利を伝えられていました。けれども、彼女達はひるむことなく全力を尽くしました。その全力ぶりは、ピッチに立ったときばかりではありません。例えば、準決勝では延長間際と思われたとき、エースの澤選手が中心になってアイシングの準備を始めたのです。みんなが表に立った時ばかりでなく裏方に回った時も一体となって、地道に戦つ

たから二大会連続で決勝に進出したのだと感じます。ひまわりやバラの花のように華やかではないけれど、自分らしく懸命に咲くなでしきの花の開花を今も教えてもらいました。これは、本校の校は、忍不抜質朴剛毅、清新癡狂の精神を通じるものだと思います。受験は団体戦とも言われます。校はの精神を發揮して三年生一丸で地道に戦つてもらいたいと願っています。もちろん三年生ばかりではありません。目標に向かって本気で頑張ることを知った皆さんは、これから先の舞台でもきっと輝くだろうと信じています。

第37号  
2015.7.17  
加治木高等学校  
PTA発行

各部及び生徒会より ..... P 2 ~ 5  
部活動大会入賞記録 ..... P 6 ~ 7  
職員紹介 ..... P 8  
〒899-5214  
鹿児島県姶良市加治木町  
仮屋町211番地

## 桜島を眺めながら

一学年主任 向 吉 信 章

七月の上旬、薩摩藩の集成館事業に関連する三つの資産を含む二三件の資産が「明治日本の産業革命遺産」として世界文化遺産へ登録されたことが決まった。薩摩藩で考へるとあらためて当時の藩主島津斉彬の視野の広さ・先見性に驚く。

今、尚古集成館から桜島を眺望する時、藩主斉彬も見たであろうその景色を前にする時、江戸幕末の激動の時代が浮かんてくる。混沌した時代の中につて斉彬公や西郷・大久保にはきっと二つの「そぞう力」があつたのではないかと思う。「想像力」と「創造力」である。世界といふ途方もないことを考へる「想像力」とその中で未來の日本の立ち位置を考える「創造力」である。

今の加治木高校生の皆さんを取り組みにはすばらしいものがある。一年生は入学して三か月余、二年生は中堅学年として、学校の中心であり、三年生は、いよいよ受験を意識しなければならない時期になつてきた。

加治木高校生もこの二つの「そぞう力」を持って、日々の生活において努力を重ねていつてもらいたいと思う。

「自己」を鍛える力が今の時期、

ほんとうに必要になる。様々な課題を自分のなかに引き寄せる力、今ある自分をさらに向上させていく力、からの自分を創つていく力、自分の中にある可能性をひろげていく努力を精一杯やつてもらいたいと切に感じる。

西郷隆盛が愛読した書物の一つに江戸時代の儒学者佐藤一斎が記した著作『言志四録』がある。そのなかの『言志晚録』に次の有名な一節がある。

少而学、則壯而有為。

壯而学、則老而不朽。

老而学、則死而不朽。

少にして学べば、則ち壯にして為すこと有り。

壯にして学べば、則ち老いて衰えず。

老いて学べば、則ち死して朽ちず。

大切な人生の礎をこの加治木高校でかためていつてほしい。

人間は生きているかぎりにおいて勉強なのだと思う。志を高く持つて二つの「そぞう力」を高めていつていただきたいと思う。

「自己」を鍛える力が今の時期、ようとは思わなくなってしまうので

みんなは、ホルヘ・ブカイという人の書いた『鎖につながれた象』という寓話をご存知ですか？

サーカス小屋に行くと、大人の象は、体の大きさに比べて、小さな杭に細い鎖でつながれています。一方、小象は、体の大きさにくらべれば、大きな杭に太い鎖でつながれています。

大人の象は力が強いので、小さな杭や細い鎖を簡単にはずして逃げることができるはずです。それなのに、絶対に杭や鎖をはずそうとも、逃げようともしません。

なぜでしょうか？

象が逃げたくないわけではありません。それなら鎖につなぐ必要はないでしよう。逃げたいのに、逃げないのです。象はまだ小さなときから、体の大きさに比べて、大きな杭と太い鎖につながれています。小象は何度も何度も力いっぱい鎖を引っ張つて杭をはずそうとするのですが、できません。そのうちに、小象はその杭をはずすことは絶対にできません。

本当に杭を外すことができるのに、外そうともしない。私たちには生まれてきた時から、家庭や学校、あるいは、社会などそれが育つていく環境の中で、気がつかないうちに、いろいろな『間違った固定観念』を身につけていきます。どのように『間違った固定観念』に気づき、それを取り除き、私たちのアタマとこころを当たり前の状態にリセットするか、それが大切なのです。

本当の意味で、できるかどうかは、全身全霊で自分の力を試してみるか否かにかかっているのです。

大人に近づいている高校生の今、『間違った固定観念』を取り除くために、何事に対しても全身全霊で取り組む姿勢を身につけてほしいと思います。

生徒指導部 児玉活也

## 鎖につながれた象

## エール

6月、梅雨の合間を縫つて霧島山に登った。加治木のゼッケンを見かけた登山者から山岳部員達に次々と「大会頑張ってね」と声がかかった。新聞報道のおかげか、ちょっとした有名人になつてはいる。山岳部を復活して4回目の県大会で女子14年ぶりの優勝、全国大会の切符を手に入れていた。

登山競技と言うと、マラソンのように山を走る姿を思い浮かべる人が多いようだ。そもそも観客は偶然通りかかる一般の登山者、それも黙々と隊列を組んで登る選手の姿を観るだけである。

競技は準備から始まる。地図を広げて計測し数値をパソコンに入力してコース断面図、また地図を透かして山域概念図を作る。さらに装備の点検、食糧献立の検討、知識勉強などと膨大な時間をかける。これが競技で大きいに役立つ。競技の実際は、1チーム4人を対象に総合的に審査される。行動40点(急登・難所で審査員が観察して体力・歩行技術を判断)、生活技術25点(制限時間内で正確にテントを張る設営、火器を安全に取扱い衛生的に調理する炊事、万が一に備えた装備の有無など)、知識30点(NHKラジオ気象通報から天気図作成、気象一般・自然観察・救急法



のペーパーテスト、事前計画書・行動記録書の審査、コース上の位置を当てる読図など)、態度5点(自然や周囲への配慮、時間厳守、チームワークなど)、合計100点満点として、例えれば、知識で1問不正解は0・2点、審査員の目の前でスリップ転倒は0・1点などと減点とされる。昨年度は0・2点差で県大会優勝を逃した。わずかなミスが勝敗を分ける。3泊4日の大会中、1日24時間つねに審査員の目が注がれ、緊張を強いられる。競技が終わつた直後の選手の安堵した笑顔は素敵である。

ところで、監督は競技隊からしばらく離れて選手の踏みしめた足跡を辿る。もし怪我などで監督が追随できなければ、引率責任者不在として選手も一緒に棄権とされる規則である。選手4人と監督の合わせて5人で1ペーティの連帯責任、登山競技は監督にとつても過酷である。全国大会最大の課題は、私のひ弱な体力にある。選手とともに監督にもエールを送つていただければ幸いである。

一年前よりも、もっと加治木高校に対する思いが強くなつた今、心から感謝の気持ちでいっぱいだ。ほんとうにありがとうございました。

進路指導主任 福元裕樹

前生徒会長 植村 南々海

## 心からの感謝

『生徒に近い生徒会』のために  
生徒会長 中園 皇志

「私は加治木高校が大好きです。」そう声を大にして言つたのは一年前の立会演説会だ。あれから一年も経つたのだ。思い返すと駆け抜けたまま一年だった。そのたびに僕は「会長と一緒に活動をして、各行事の運営や挨拶、養護学校との交流や街頭募金などの活動を行つた。また今年はエボラ出血熱で苦しむ方への募金活動や加治木タイムの呼びかけなども積極的に行い、生徒会宣言にもあるように自主・自律を旨とした地域社会に貢献する活動に取り組んだ。このような活動をする中で私の未熟さ、不慣れさ故に多くの迷惑や心配を、生徒会役員や先生方、そして生徒のみなさんにかけたことだと思う。しかし、いつも私を励ました最後まで全力で一緒に頑張ってくれた役員や、私の心を汲み温かく受け入れてくださった先生方、そして頼りのない私を会長にさせてくれたみなさんのお陰で、心から楽しく笑顔で活動することができた。

駆け抜けるようだつたこの一年。たくさんの方々の経験をさせて頂き、たくさんの温かい言葉に触れ、たくさんの人と向き合うことができた。だからこそ感謝の気持ちを今までよりも強く感じ、恵まれた環境で頑張ることを幸せに思つた一年でもあつた。この一年で得たものを思い出として残していくのではなく、これからに活かしていきたい。

一年前よりも、もっと加治木高校に対する思いが強くなつた今、心から感謝の気持ちでいっぱいだ。ほんとうにありがとうございました。

僕は人をまとめるということは得意ではありません。拙い部分も多々あることは思いますが精一杯がんばりますので、どうかよろしくお願いします。

任命式から一ヶ月ほどがたち、僕は多くの方から「会長がんばれよ」「会長しつかりしろよ」と声をかけていました。そのたびに僕は「会長という自覚を持って学校生活を過ごさなければ」と思います。僕は生徒会長という役職に就くにあたつて、支えてくれた全ての方々と、選挙で戦つた人の思いをいつも胸に秘めて忘れないようにしたいです。

僕は生徒会執行部を生徒にもつと身近な存在にしたいと考え、「生徒に近い生徒会」というスローガンを自分自身に掲げています。今までの生徒会執行部は献身的で裏方に徹する部分が多くなった気がします。そういう部分ももちろん大事だとは思いますが、僕はもっと生徒に直接的に貢献できるような活動をしていきたいです。生徒会執行部十三名の力を合わせれば、とても実のある活動ができると確信しています。しかし、生徒会執行部だけが活動するだけでは不十分です。加治木高校の生徒皆さんの御協力を頂かなければなりません。しかし、僕の掲げる『生徒に近い生徒会』も達成できません。どうか御協力をよろしくお願いします。

